

乳がん検診（施設）

動 向

本邦における乳癌の罹患，死亡率はともに近年なおも増加傾向にあり，平成14年には，乳癌死亡数は女性の悪性新生物による死亡全体の8.0%を占めている。

さて死亡数の削減対策として，旧厚生省は乳癌検診を昭和62年から老人保健法に基づいて義務づけ，30歳以上を対象に視触診検診を実施している。その後，有効性評価の研究により，平成12年4月にはマンモグラフィ併用検診法のガイドラインを提示している。

これに先駆けて，当協会では昭和57年来，乳癌検診として視触診法を行い，更に，平成5年1月からは横浜市の委託により，市内住民で40歳以上の5歳間隔を対象にマンモグラフィ併用視触診法を開始し，平成7年に50歳以上の区切りを外し，次いで平成13年10月以降，50歳以上の隔年を対象にマンモグラフィ併用検診を行っている。近年，頓に乳癌について，特にマンモグラフィ検診に対する意識が向上し，マンモグラフィ受診者の増加が顕著である。また超音波併用検診受診者の増加傾向がある。今回は平成15年度の乳癌施設検診の実績を纏め，些かの考察を行う。

方 法

- 1) 視触診検診法：各種団体の被保険者，その配偶者，さらに個人申し込み者を対象に視触診のみ施行。
- 2) マンモグラフィ併用視触診検診法：希望する個人，一部の団体に対してマンモグラフィの二方向撮影（MLO，CC）を，また，横浜市施策検診では50歳以上の偶数年齢者（隔年毎）を対象に一方方向撮影（MLO）を行い，即日読影と同時に視触診と，更に自己触診法の指導を行っている。後日，マンモグラムのダブルチェックを，市の施策群には横浜市総合判定機関がチェックを行い，要精検者を判定している。
- 3) 希望者には超音波検診も併用している。

結 果

平成15年度の乳癌受診者総数は，18,808人と年々漸増している。その内訳では，視触診検診法による受診者は11,012人で前年度より845人減少しているが，一方マンモグラフィ併用検診法では3,478人で711人の増加が見られる。なお精検施行後の経過観察者は4,318人と増加の傾向にある。（表1）

視触診検診法による要精検者は13.6%でその精検受診率は91.8%で，そのうち発見乳癌は21例で，発見率は0.19%である。なお，初診者は再診者の約40%であるが発見乳癌は10例で，発見率が0.31%と高率となっている。40歳代の受診者は3,376人で，乳

癌は9例で発見率は0.27%である。60歳代に2例，83歳の1例を検出している。また，発見乳癌症例のうち有自覚者は16例で，76%を占め，5例が進行癌である。一方無自覚者は5例であるが，しかし臨床上的での触知不能例は血性分泌により検出している1例のみで，また2例が進行癌である。さて，発見乳癌21例中マンモグラフィによる検出が20例で，そのうち5例は石灰化像による。一方マンモグラフィでの検出不能が1例あり，56歳の乳癌で，1.0cm大の腫瘤を触知し，超音波により描出している。なお，早期癌はTisの2例を含む計14例で，67%である。年代別の早期癌は40歳代が77%，50歳代では66%である。（表2）

マンモグラフィ併用視触診検診法による受診者は3,478人で，そのうちには市の施策検診を当施設で取り扱った1,819人が含まれている。要精検率は10%で発見乳癌は12例，発見率は0.35%である。なお市の施策群の精検結果は当施設での精検受診者のみを表示している。因に市の施策群以外の検診者は1,659人でそのうち乳癌が8例あり，発見率は0.48%と高率である。さて初診者は1,333人で再診者の約60%であるが乳癌が6例で発見率0.45%と高率である。また年齢別では60歳代に乳癌が9例で発見率は0.76%である。また，発見乳癌12例のうち，有自覚者が8例と多く，しかも臨床上的での触知可能例は11例であり，僅か1例のみが触知不能で，マンモグラム上でカテゴリー4の石灰化像により検出している。一方，マンモグラフィで検出不能が1例あり，64歳の乳癌で触知可能な1.5cm大の腫瘤を超音波により描出している。さて早期乳癌は石灰化像から検出されたTisの3例を含む8例で，全乳癌の66%を占めている。（表3）

次いで精検後の経過観察者は4,318人で，発見乳癌は6例で，発見率は0.14%である。年代別では40歳代から2例，60歳代3例，70歳代に1例ある。診断根拠となった主な所見はマンモグラムの腫瘤像による4例，石灰化像からの2例である。そのうち早期癌はTisの1例を含む計5例である。（表4）

さて，以上の結果について考察するに視触診検診法，マンモグラフィ併用検診法ともに初診者の乳癌発見率は再診者より高率であり，従って初回受診者の勧奨が望ましい。また，発見乳癌症例の多くは有自覚者で，しかも，殆どが臨床上的触知可能で，進行癌も多くあり，自己触診法の啓蒙により有自覚者は積極的に乳癌専門医に受診するよう指導することが肝要である。更に，マンモグラフィ併用検診法が視触診法よりも乳癌発見効果は優位ではあるが，マンモグラフィでは検出不能な腫瘤触知乳癌症例が間々あり，触診所見は蔑ろに出来ないことを強調したい。

関係の集計表は87頁に掲載